

せんだいメディアテーク

# 共有のデザインを考える

## スタジオ・トークセッション記録

西村 佳哲 / 杉浦 裕樹 / 前田 邦宏 / 森川 千鶴 / 辻 信一  
渡辺 保史 + せんだいメディアテーク 編







- 4 まえがき
- CHAPTER 1
- 7 **人が生き生きとする場所のデザイン**  
ゲスト:西村佳哲
- CHAPTER 2
- 33 **コミュニティという『現場』のデザイン**  
ゲスト:杉浦裕樹
- CHAPTER 3
- 57 **『つながり』を見えるようにする共有のデザイン**  
ゲスト:前田邦宏
- CHAPTER 4
- 83 **人と人をつなぐ仕事のデザイン**  
ゲスト:森川千鶴
- CHAPTER 5
- 109 **スロープレイス、スローコミュニケーション**  
ゲスト:辻信一
- CHAPTER 6
- 139 **スクエア・トークセッション  
メディアテークをre-designせよ 共有のデザイン100のアイデア**  
ゲスト:西村佳哲、杉浦裕樹、前田邦宏、森川千鶴
- コーディネーター:渡辺保史
- 161 **スタジオ・トークセッションを振り返って -参加者より-**
- 162 「共有の空間で考える共有のデザイン」 小野田泰明
- 163 「しあわせなひとびと」 伊藤みや
- 164 「Topologyの空間>cofin(community of interests)【コフィン】」 堀口徹
- 165 「関心空間」キーワード一覧
- 166 あとがき



## 与えられた公共性をほどいて

まえがきに代えて

この本は、2002年5月から2003年3月まで隔月で行われた「スタジオ・トークセッション-共有のデザインを考える-」の記録である。

2001年にオープンしたせんだいメディアテークは、これまでにない公共施設として注目を集めてきた。まず、ゆるやかな傾きをもった鉄骨の構造体に支えられたガラス張りの外観が目を引く。また、図書館やギャラリーなどの複合施設はこれまでもあったが、映画やメディアアートの企画からボランティアグループによるワークショップまで行われるパズールのような事業の展開はなかなかない。なにより「メディアテーク」という名を持つ公共施設は日本で初めてのものである。しかし、よく見れば決して最先端の技術や機能だけの場所ではなく、既存施設から受け継いだサービスも多くあり、ましてや毎日ここに集う3000人以上のほとんどは、都市の日常を生活しているごく普通の人々である。

毎回のセッションは（1階オープンスクエアで行われた最終回をのぞけば）、一見したところフリースペースでしかない7階スタジオ b を会場にして、毎回20-30人の参加者がゲストの話聞き、それぞれの意見を交わし、終了後も閉館間際まで立ち話が続くという、どこか放課後の教室のような集まりであった。

けれども、そんな穏やかな雰囲気とは裏腹に、このプロジェクトの発端はよりシビアな現実の課題だった。さまざまな機能が混在し、壁の少ない空間で複数の活動が展開されるこの空間で聞かれた声は、となりあうワークショップの音がうるさい、受験生が机を占拠している、「普通の」部屋がほしい……。公共施設ではよくあるクレームだが、せんだいメディアテークでは他にも増して自分と他人の領域が重なり合ってしまうことが多い。「歩くサイン」（スタッフ・ベスト）をつけているスタッフは、その場面に出くわすたびに注意するようにお願いされるのだった。

みんなが利用する場所で他人に迷惑をかけるのは良くない。また、スタッフはその場所の秩序を保つために仕事をすべきである。そのことは全くもって正しい。しかし、すべての人の要望を聞こうとすれば、それぞれの活動ごとに部屋を区切り、子細に規則を作

ることになるだろう。つまり、従来型の公共施設をつくるしかない。けれども、それではせんだいメディアテークが持つ可能性を摘んでしまうことになる。たとえば、物音が気になるのなら、隣り合う人同士が相談することはできないか。そのような問いから、場を共にする人々が自分たちで問題を解決する方向を探る試みがはじまった。

そんなとき、メディアテークを訪れて興味深いレポートをしていた渡辺保史さんの名前を知った。渡辺さんの著書『情報デザイン入門』（平凡社新書）を読みつつ、ともすれば規則の問題になりがちで、また一方では「公共圏」や「公共哲学」といった学問的な問題に傾きがちなこのテーマを、リアルな日常のテーマとして一緒に考えてもらえないだろうかと相談したのだった。一般的に考えれば、施設管理の問題なのだからスタッフの勉強会にすれば良かったのかもしれない。しかし、渡辺さんの協力を得たことで、この取り組みはさまざまな人にとって発見のあるものになるのではないかと感じたのである。そこから、これまで館の運営にアドバイスをいただいていた方々にも集まってもらい、キックオフミーティングと称して準備が進められていった。

はじめてみれば、カフェから電子空間までさまざまな場を作り活動しているゲストとの対話を聞くために、学生や地元で表現活動をしている人、大学の先生、そしてスタッフなど異なる立場の参加者がスタジオ b に集まり、ときには通りがかりの人も足を止めて話が繰り広げられることとなった。

世代も価値観も違う人々がこの空間にいる。そのなかで、決められたルールに拘束された安定でもなく、小部屋に閉じこもる安息でもなく、それをデザインすることで場所や活動を共有していくためのコミュニケーションが、スタジオ・トークセッションであったように思う。そしてまた、ここで生まれたアイディアとネットワークは、そのことを「考える」から「実践する」へと動いてもいる。NPO を立ち上げて活動をはじめた人、別のテーマでレクチャーを始めた人、もちろんせんだいメディアテークでも実践がはじまり、新しいつながりが育っている。この本に記されたセッションの記録は、せんだいメディアテークという場を共有した人々がつながった軌跡の、ほんの一部である。

小川直人

せんだいメディアテーク企画・活動支援室

